

## アジア太平洋戦争～兵士と東南アジアから考える

### はじめに～一兵卒としてレイテで死んだ伯父

#### I、中国大陸における兵士たち～おもに日中戦争を中心に

##### (1)一撃で屈服する筈の戦場で兵士たちが体験したもの

###### ①上海攻略戦に投入された兵士たち

- 1)中国側…ドイツ軍によって鍛えられた最精鋭部隊の投入。市民の支援
- 2)日本側…対ソ戦に向けて、現役兵を温存し、主に召集した予備役・後備役の兵士を派兵  
→中国側に抵抗を前に、日本側の敗色濃厚に→増援部隊を次々に投入  
海軍力と飛行機の優勢で盛り返し、杭州湾上陸作戦により勝利する

###### ②兵士たちが出会った戦場

- 1)臭い…死体を回収できない→腐敗した兵士から発するガス、ウジとハエ  
排泄物などの臭い→戦闘態勢のままの排泄、建物のなかで排泄物だらけ
- 2)銃弾・砲弾、爆裂音、傷ついたり精神の安定を失った兵士の叫びや悲鳴、火薬の臭い。
- 3)汚れた飲み水…泥水・汚水・死体が浮かんでいる水たまりの水
- 4)接近戦…必死の形相の敵兵士と銃剣で殺し合う。血しぶきを浴びることも
- 5)なかまたちの死…自分の村や地域の出身者、同級生の死を看取らねばならない。

###### ③戦争への慣れ＝「人を殺すと人間は変わる」。

##### (2)断ち切られた兵士の願い＝南京攻略戦へ

###### ①またも命令無視の戦闘拡大→「南京一番乗り」をめざす司令官たち

###### ②補給の準備なしでの作戦開始→「敵地に糧を求める」。

日本軍の特徴＝輸送を軽視、「輜重輸卒が兵隊ならば、トンボチョウチョも鳥の内」  
輸送手段は駄馬が基本、トラックなどは数も少なく性能も悪い

###### ③「徴発」という名の略奪

- 1)暴力的な「徴発」、その過程での暴行・強奪、殺人、強姦に、証拠隠滅のための放火  
→戦地刑事犯の急増、「性感染症」の流行(⇒従軍慰安所開設に)
- 2)「皇軍」ではなく「蝗軍」…日本兵の行軍のあとには何も残らない
- 3)軍紀の乱れ…荒廃していく倫理「おまえたちも掠奪してきた物を食べているのだろう」
- 4)司令官も見て見ぬふり→「それなら食料をもってこい！」
- 5)若杉大尉(三笠宮)の観察→天皇にもその様子を報告

##### (3)南京でおこったこと

###### ①1937年12月 日本軍の南京へ侵入→中国軍、多くの兵士(実際は農民など)を残したまま指揮官が逃亡

###### ②日本軍による「残敵掃討」→隠れている兵士の捜索、とはいえどのようにして？

###### ③大量の「捕虜」の出現

###### ④中島今朝吾師団長の日記

一、だいたい捕虜はせめ方針なれば、かたっぱしよりこれを片付くこととなしたれども、千、五千、一万の群衆となればこれが武装を解除することすら出来ず…部隊をトラックにて増派して監視と誘導に任じ、十三日夕はトラックの大活動を要したり…  
一、後に至りて知るところによりて佐々木部隊だけにて処理せしもの約一万五千、太平門における守備の一中退長が処理せしもの約一三〇〇、その仙鶴門付近に集結したるもの約七八千人あり、なお続々投降し來たる。  
一、この七八千人を片付くるには相当大なる壕を要し、なかなか見当たらず。一案として百二百二分割したる後、適當の箇所に誘いて処理する予定なり。(『増刊歴史と人間』)

###### ⑤「偕行社」の調査⇒「南京虐殺はなかった」はずが…。

##### (4)「持久戦」「保安戦」のなかで

###### ①「点と線」の支配

- 1)1938年の徐州作戦・武漢作戦以後、戦線のさらなる拡大は困難に＝「持久戦」に  
⇒都市(「点」と)と鉄道・主要道路(「線」)の確保しかできない。広大な「面」(農村)は支配できない
- 2)共産党勢力の農村⇒「解放区」を拠点としたゲリラ戦展開⇒日本軍小部隊への奇襲・全滅相次ぐ  
⇒あらゆる中国人が「敵」、自らの命を狙っているというストレス状態に

###### ②華北における「燼滅(じんめつ)作戦」(三光作戦)の開始

※三光作戦…「奪い尽くし(「略光」)、焼き尽くし(「焼光」)、殺し尽くす(「殺光」)

- 1) 「土民を仮装する敵」や「敵性があると認められる15才以上60才までの男子」の「殺戮」「敵性部落」の「焼却破壊せよ」。毒ガスの使用、細菌兵器？
- 2) 無人区と「戦略村」の設定(cf.ベトナム戦争)
- 3) 「ウサギ狩り」…中国人をとらえ、日本国内で鉱山労働などに使役(中国人の強制労働)
- ③多くの日本兵の共通した苦難＝「行軍」…50キロの荷物をもって、敵地を1日30キロを行軍⇒「苦力(クーリー)」に荷物はこぼせる。
- (5)加害者であることを強いられた被害者としての兵士たち
  - 1) 「南国土佐をあとにして」の原曲…「鯨」兵団の望郷の歌
  - 2) Yさんの告白？
  - 3) 兵士たちの後半生…「虐殺はなかった」ということは

## II、アジア太平洋戦争の開始～指導者たちは何を考えていたのか

### (1)1939.9 第二次世界大戦の開始⇒1940破竹の進撃・欧州大陸を制圧・英上陸をめざす

#### 三国同盟論の再開…陸軍を中心に「勝ち馬に乗れ」論

→日本がドイツと結べば、アジアの蘭・仏・英の植民地が獲得できる

- 1) 「東亜新秩序」の実現。「アジアモンロー主義」の夢実現へ
- 2) 援蒋ルートを切断し、中国への補給路を断てば中国は屈服するはず
- 3) 天然資源(とくに石油)の獲得…資源のアメリカ依存からの脱却

### (2)アメリカの危機感

- ①イギリスの敗北とナチス＝ドイツの世界支配⇒アメリカ孤立の危機  
イギリスへの援助⇒大西洋憲章・武器輸出法など →独ソ戦以後は、対ソ支援も本格化
- ②日本の中国侵略への対応…国民党支援＝援助の強化、不平等条約の撤廃  
ドイツとの結合(「三国同盟」)・日本の南洋進出⇒国際秩序の解体  
→日米通商航海条約破棄宣言、中国援助拡大
- (3)1940/7 第二次近衛内閣成立…1)新体制の構築、2)大東亜新秩序構築、3)北部仏印への進駐
- ①北部仏印への進駐…援蒋(仏印)ルートの切断、石炭などの資源獲得をめざす
- ②日独伊三国同盟の締結…海軍の態度変化(対米を強調することで海軍予算拡大に)  
→アメリカによる経済制裁の強化、7月航空機ガソリン、9月くず鉄の輸出禁止
- ③1941/7、御前会議の開催＝独ソ戦のもとの陸軍と海軍、北進論と南進論の調整  
・関東軍特種演習(軍隊をシベリア国境に結集⇒シベリア進出も可能に)
- ④南部仏印(＝ベトナム南部)への進駐＝シンガポール・インドネシア・フィリピンへの爆撃が可能に  
⇒アメリカ、石油の全面禁輸にふみきる。

### (5)石油禁輸の衝撃⇒交渉・妥協の石油禁輸を解除か、開戦か。石油備蓄量というタイムリミット。

### (6)日米交渉の本格化⇒4/4 交渉再開・本格化(野村・来栖大使 vs ハル国務長官)

米側の要求…仏印、中国からの撤兵、さらには満州からの撤兵も

日本側…勝利の展望は皆無。1937年以降さらには満州事変以後の「戦果」をすてられるか？

### (7)9月の御前会議…開戦の方針を決定(「帝国国策遂行要領」)

10月上旬までの日米交渉継続→不調時は開戦へ

### (8)近衛内閣における閣内対立激化

- 1) 近衛…交渉継続、中国撤兵を認めることもやむなしの方向へ
- 2) 陸軍(東条ら)…交渉打ち切り、開戦決意を要求
- 3) 海軍…勝つ自信はなし。「近衛がいいだせば賛成する」

ただし、太平洋の日米艦隊・航空機の割合では日本がやや優勢との観測→開戦するなら今

### (9)10月、東条英機内閣成立…9月決定を白紙撤回・再検討の条件付＝慎重派の東郷・賀屋入閣

- ①11/5、御前会議…9月の御前会議の内容を再確認、12/1をリミットに、開戦準備開始  
⇒大義も、戦略も、勝利の見込みもないままの開戦決定
- ②日本側、最終交渉案「仏印撤退・石油禁輸の解除」提出(東郷外相らによる)  
⇒アメリカ側の回答(ハル＝ノート)…中国からの無条件撤退+満州事変以前への復帰
- ③12/1御前会議→対米英蘭戦開戦を決定、各部隊に通知
- (10)開戦…12/8陸軍部隊のコタバル奇襲上陸、海軍航空機隊ハワイ真珠湾奇襲攻撃  
⇒アジア太平洋戦争発生、ドイツ・イタリアの対米宣戦＝第二次大戦の世界大戦化

## III、アジア太平洋戦争

### (1)日本はだれと戦ったのか…単に米英中ではない。

大西洋憲章＝連合軍共同宣言による戦争目的を共有する約50カ国の連合国との戦争。

→戦争目的が達成できなければ講和できない

### (2)なぜ戦争を始めたのか

- ①東条内閣の説明⇒1)中国からの無条件撤退 2)南京政府の否認 3)日独伊三国条約の破棄、は呑めない
- ②戦争計画「対英米蘭蔣戦争 終末促進に関する腹案」(11/15)⇒ふたりの参謀の願望を文章化  
ドイツがイギリスを破ってくれるだろう。援助がなくなれば中国も屈服する。友達のなくなったアメリカでは厭戦意識が高まってやる気を失うだろう
- ③戦争の「大義」=「大東亜共栄圏」の建設、そのための戦争=「大東亜戦争」  
「東亜新秩序」を發展させ、欧米列強の植民地支配からアジアを解放し、日本を中心とした「共存共栄」のブロック=「大東亜共栄圏」を建設つくる
- (3)緒戦の勝利と戦局の転換
- ①マレー半島・フィリピン・オランダ領東インド(インドネシア)・ビルマなどを占領。  
ソロモン諸島やニューギニア北部へも進出
- ②初期の「大戦果」のなかで…持久戦=自存自衛の陸軍と、短期決戦の海軍
- ③ミッドウェー海戦の大敗(42/6)…海軍航空部隊への大打撃⇒戦局の変化
- ④ガダルカナル島攻略戦での敗北(43/2)→制海権・制空権の喪失、輸送力の低下
- ⑤アメリカ、二方面からの飛び石作戦開始→各地で「玉砕」あいつぐ
- (4)1944年 サイパン島陥落⇒絶対国防圏の崩壊=米爆撃機による本土空襲可能に  
→東条内閣崩壊、戦争終結を望みつつ手が打てない状況
- (5)1944年 米軍、レイテに上陸、レイテ沖海戦の大敗=日本海軍の壊滅

## IV、大東亜共栄圏

### (1)東南アジア進出⇒「ふたつ」の戦争目的

- 1)タテマエとしての欧米帝国主義からの解放=「大東亜共栄圏」建設  
2)ホンネとしての資源(石油・ゴム・米など)獲得⇒自存自衛体制の確立

### (2)フィリピン・ビルマに、大東亜共栄圏内での「独立」を約束

- ①ビルマ…アウンサンら反英活動家をビルマ独立義勇軍を日本軍が訓練。「バモオ政府」として「独立」  
フィリピン(米が独立を公約済)→コモンウェルス政権の一部が「ラウレル政府」として「独立」
- ②インドネシア・マラヤなど=軍政の維持→インドネシアは独立の方向へ
- ③仏印(ベトナム)=フランス(ビシー政権)との共同統治→45年日本の単独統治に

### (3)日本の東南アジア支配

- ①主に華僑に対する迫害・虐殺…とくにシンガポール(血債の塔)、マラヤ(←民族間の対立をあおる)
- ②資源・物資、労働力の収奪が基本=「結果的には、必要なものだけ作らせて、奪い取る」  
→強制労働、鉱山労働や泰緬鉄道、米作りへの動員、軍票の使用強制=破滅的インフレの発生
- ③現地のことを全く知らないものによる軍政→日本語使用、皇居遙拝や神社参拝の強要、ラジオ体操など
- ④対日「協力」者

- 1)ビルマ…アウンサン将軍とバモオ政権(ビルマ独立義勇軍)
- 2)フィリピン…「ラウレル政府」=ナショナリストによる協力と抵抗の「役割分担」
- 3)蘭印(インドネシア)…スカルノら、日本軍に協力しオランダとの戦いを準備、  
⇒日本側から「独立」付与の約束を手に入れる→1945/8 スカルノ・ハッタによる独立宣言
- 4)インド=チャンドラ・ボーズ(インド国民会議)⇒インド国民軍結成、インパール作戦にも参加  
(cf.ネルー・ガンディーら国民会議主流派は非協力運動=「インドから出て行け」)

### ⑤抗日ゲリラ

- 1)ベトナム=ホーチミンら共産主義者を中心にベトナム独立同盟(ベトミン)結成
- 2)フィリピン…アメリカの指揮下の組織、フクバラハップ団(共産系)、地方勢力の並立・抗争  
→激しいゲリラ戦の展開。泥沼化=日本側の被害も、住民虐殺などの発生  
→フィリピン戦で米軍と結び、日本軍を追い詰め残兵を討伐  
対日勝利後、アメリカによるフクバラハップ団弾圧⇒親米派による独立承認
- 3)ビルマ…アウンサンら最終段階で反ファシスト人民自由連盟を結成、武力抵抗に

### (4)1943 大東亜会議開催…各国の傀儡政権を結集

## IV、兵士たちはどのようにして死んだのか(吉田裕『日本軍兵士』をもとに)

- ・広い意味の餓死者(栄養失調・使用失調による戦病死者)140万人(60%強)  
・海没死者…約40万人(20%弱)  
・戦闘死者など…約20%(特攻死・バンザイ突撃・日本兵による「処置」・自殺なども含む)

### (1)餓死・戦病死

背景：制海・制空権喪失による深刻な食糧不足、軍需品の安着率96%(42)→51%(45)へ

- 1)マラリアと栄養失調 栄養失調を原因とするマラリアが多い
- 2)戦争栄養失調症…極度の痩せ、食欲不振、貧血、慢性下痢→「生ける屍のようになる」  
・アメーバ赤痢・マラリア・結核に続いて発生する「続発性栄養失調症」

- ・原発性戦争栄養失調症←背景には精神神経症との強い関連「身体が生きることを拒否した」  
ストレスや不安、緊張、恐怖などによる体内環境の変調からくる摂食障害(拒食症)

(2)海没死(溺れ死) 海軍182000人陸軍176000人

- アメリカ海軍の潜水艦攻撃、輸送船の不足と劣化からくる過密・劣悪な環境(熱射病による死者)
- ・魚雷爆弾の命中(爆発による死者・負傷者)⇒パニック(失神者・精神錯乱者)⇒浮遊物の奪い合い
- ・圧抵傷(高所から地上などに落ちたときの衝撃)・水中爆傷(肛門からの水圧で内部から腸壁を破る)
- ・突然の発狂者が続出(出港直前・救出後)

(3)特攻死…航空機・モーターボート(震洋・マルレ艇)・改造魚雷(回天)

(4)自殺…

- 1)内務班での私的制裁(物理的暴力と精神的苦痛)⇒自殺を増やす日本軍の体質  
→根こそぎ動員による肉体的・精神的に軍隊に適応できない兵士の増加

2)退却戦、捕虜になることを嫌うもの(硫黄島…「六割自殺、一割他殺、一部事故死」)

(5)「処置」という名の殺害=日本軍自体による兵士の殺害「戦闘に絶えざるものは適宜処置すべし」

- 1)傷病兵の殺害→収容できないものへの毒物注射や自決強要命令、捕虜になることを禁じる
- 2)「後尾収容班」「落伍者捜索隊」→行軍に際して落伍者に自決を強要、落伍者を捜索自決を強要・殺害
- 3)「自傷者」の増加=厭戦気分の蔓延。「とうとう自分で負傷しやがった」

(6)食料強奪・人肉食のための殺害「第三の敵は『ジャパングリラ』とよんだ日本兵の一群だった」

(7)処刑…食料獲得を目的に部隊を離れた兵士を軍法会議なしに処刑した

## おわりに～兵士たちが見た風景

彼等はヤシの丸太の粘土で固めた砲台が、土台ごと吹き飛ぶのを見た。ヤシの並木が根元から燃え、梢から仕掛け花火のように焰を吹き上げるのを見た。隣にいた戦友が全然いなくなり、気がつくとな彼自身も大腿の肉がそがれていたりした。ある者は胸に手を当てて眠るような格好で横たわっていた。頬をくだかれ、眼球が枕元に転がっている死体もあった。首がない者もいた。手のない者、腸が溢れて出ている者、想像を絶したこわれ方、ねじれ方をした人間の肉体がそこにあった。  
空中には掘り返された土の匂い、火薬の匂いがまじって、異様にツンとする匂いが漂っていた。いつもの大言壮語に似ず目を吊り上げて、ふるえている下士官がいた。両手をだらりと下げて、壕の外へ歩き出す見習士官がいた。土に顔を埋めて泣きじゃくっている補充兵がいた。最もよく訓練された下士官でも、自分の身体がこのまま空中に飛び上がり、ずっと後ろの林の中へ、ふわりと着陸する奇跡は起こらないものかな、ということを考えて。(『レイテ戦記・上』P79)

レイテ戦における生存者⇒一割を大きく割り込む。

艦砲射撃で、米軍との戦いで、フィリピンゲリラによる討伐、飢えや病で、日本兵同士の殺し合いで…

### 砕け散ったのは日本兵だけではなかった。

①フィリピンにおける死者

米軍：約16,000人(陸軍のみ)

日本軍：陸軍約336,000人、海軍などをあわせて約46.5万人

フィリピン人の死者：約111万人。

②フィリピンの物的被害

フィリピン全土が荒廃、攻防戦でマニラも廃墟となり復興されないまま無秩序に発展

徴発によりレイテの家畜の半分から2/3が喪失

艦砲射撃や爆撃…フィリピン全体の公共施設の80%、個人財産の60%が破壊される

③戦後賠償として

フィリピン政府がアメリカに請求した額が約800億ドル⇒支払われた額が6.2億ドル

日本の賠償⇒5.5億ドル(1980億円)。ただし役務提供の形式

### 《参考文献》

吉田裕「アジア・太平洋戦争」「日本軍兵士」森武麿「アジア・太平洋戦争」木坂順一郎「太平洋戦争」

江口圭一「二つの大戦」「十五年戦争小史」藤原彰「餓死にした英霊たち」「日中全面戦争」

「東南アジア現代史I・II」ほるぷ出版「写真記録 日本の侵略：中国／朝鮮」

劉抗・中原道子「チョウプスイ～シンガポールの日本人たち」

京都新聞社「防人の詩レイテ編」大岡昇平「レイテ戦記」保阪正康「帝国軍人の弁明」